



京都部会(第4回)

日時: 2009年10月9日(金)18:00~20:00

場所: 同志社大学 光塩館

【内容要旨】

- (1) 第4回の京都部会は10名の参加者で開催された。まず初めに、経済教育ネットワークの篠原総一代表者から、8月に開催された先生のための「夏休み経済教室」(名古屋、大阪、東京)、北海道高等学校経済研究会、および、八戸で開催された経済教室ワークショップについての報告があった。さらに、東京部会(2009年10月6日開催)で新井明氏(都立西高校)から報告された「入試問題検討プロジェクト」の進捗状況と今後の予定についての説明がなされた。その後、京都部会からプロジェクト・チームに参加している先生方から、検討作業についての感想をお聞きした。全体的な印象としては、知識偏重の問題が多い中で、記述させる問題が出題されている大学は評価できるという意見があった。また、資料を活用するような問題が少ない点も指摘された。
- (2) 引き続き、篠原総一氏から東京部会(2009年10月6日開催)で議論された高校生に「市場の効率性」をどのように分かりやすく教えるかについての報告がなされた。このテーマが東京部会で取り上げられた理由は、去る8月に開催された先生のための「夏休み経済教室」で、期せずして大竹文雄氏(大阪大学)が労働の問題について、また、中川雅之氏(日本大学)が財政の問題について講義されたとき、二人とも同じように「市場の効率性」の説明から始められた。というのも、労働の問題も財政の問題も「市場の効率性」の理解を前提にして説明すると理解しやすくなるという理由からであった。

ただ、両氏とも「市場の効率性」を説明するために消費者余剰や生産者余剰の概念を用いて説明されていた。ところが、余剰は市場の部分均衡の中で使われる概念であるため、多くの教科書で引用されているアダム・スミスの「神の見えざる手」、すなわち一般均衡の中での資源の最適配分を説明しているとは言い難い。この資源の最適配分をどのようにして学校現場で教えているかの意見交換が行なわれたが、異口同音に教えずにないという意見であった。今後、このテーマについて、高校生に分かりやすく教える方法についての検討が必要だということになった。

(文責: 西村理)